

新潮文庫

硫黄島・あゝ江田島

菊村 到 著



新潮社

硫黄島・あゝ江田島

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 142

昭和四十一年二月二十八日 発行
昭和四十五年二月二十五日 印刷

著 者 菊 村 到

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 東京 (〇三) 二六〇 一一一
振替 東京 八〇八 番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求
めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

硫黄島・あゝ江田島

菊村 到 著



新潮社版

1713

目次

硫黄島	セ
あゝ江田島	四三
しかばね衛兵	一〇七
奴隸たち	一二九
きれいな手	一七一
ある戦いの手記	一九九

解説 日沼倫太郎

硫黄島・あゝ江田島

硫

黃

島

片桐正俊がはじめて私の前にあらわれたのは、一九五一年四月二十一日の夕方であった。私たちは私のつとめさきである新聞社の応接室で顔をあわせた。そのときかれの着ていた、いくらかくたびれかけた紺サアジの背広の肩さきにこまかな水玉がきらきらひかっていたのを、私はいまでもあざやかに思いうかべることができる。

「雨になったんですね」と私は言った。それは私のかれに対する最初の言葉だったと思う。するとかれはそれがなにか自分の落度でもあるかのように肩をすくめて「ええ」と小さく答えた。

かれはひどく顔色がわるかった。髪の毛をみじかくあげていて、そのために四角い顔がよけい角張って見えた。一般に表情に乏しくて、ひかえめな静かな声音で、多少もどかしそうに言葉をさがしながらゆっくり話をすすめていく、そんな印象が、かれの生き方の不器用さを正直に示しているようで、私はなんとなく好感をもった。かれの私をたずねてきた用件というのは、ひどく風変りなものだった。かれは言いだしにくそうにして、いつまでも、もじもじしていた。ときには苦しそうに身をよじったりするのだった。かれは海軍上等水兵として、硫黄島にいたのだが、木谷という同じ階級の戦友と、終戦後もなお洞窟にたてこもっていて、一昨年二月にやっと帰国した、と語った。

そういえば、土気色にくすんでいて無表情でかたくなな感じのかれの顔つきには思いあたるふしがあった。私は一カ月ほど前にもフィリピンの山奥に立てこもっていて、ようやくこんど帰国

したという兵隊に市ヶ谷の復員局で会ったばかりだが、そういった人たちに共通のある表情が片桐のうえにもひろがっているのに気がついた。この種の人たちは、かれらがそのなかで住みついたジャングルの土や木や草や岩やすべてそれらのものとの一種の同化作用によって、非人間的なもの、あるいは自然に似てくるのではないか。そんなふうに思われるのである。だからときどき妙に話の通じあわないようなところが出てきて、いらいらさせられてしまう。片桐正俊にもたしかにそういうところがあった。

かれが用件をきりだしたとき、私は思わずひざをのりだしてしまった。それは私をそうさせるだけのものをもっていった。けれどもかれがしゃべりおわったとき、私の胸にはいくつかの疑点のようなものがかたまつてぶつぶつ吹きだしてきていた。その用件というのはこういうことであつた。

片桐正俊は一九四四年二月一日、横須賀の武山海兵団に入団した。三カ月後、館山の砲術学校にはいった。さらに三カ月たつと、かれは浦賀の防備隊にまわされ、その年の九月、硫黄島警備隊に編入されて横浜を出発した。かれが硫黄島に着いた時分はまだ空気は、それほど切迫してはいなかったが、十一月にはいると空襲もはげしくなり、ぐんぐん戦局はかたむきはじめ、ついに翌年三月、二万数千名の日本軍将兵はほとんど死にたえてしまったのである。そんななかにあつて、片桐は自分の生命をまもりとおし、木谷上水とふたりで終戦後さらに三年余も穴居生活をつづけた。そしてこの期間にかれは大学ノオトに鉛筆で、せっせと日記を書きつづけた。それは米軍に投降するときまでつづいたのだが、投降するとき、そのノオトを岩穴にうずめてきた。こんど米軍当局の特別のとりはからいで、かれが単身硫黄島にわたり、その日記を掘りだしてくるこ

とになった。そのことを新聞記事としてとりあげてほしい、それがかれの用件のすべてであった。私にはかれがいいかげんなことを言っているとは思われなかった。かれははじめから終りまで低いおしつぶしたような声で、まだるっこい時間をかけて、そういうことをしゃべった。あるいはかれは昂ぶってくる気持をおさえようとしていたのかもしれない。かれの態度は、いくぶんものうげで、いくぶんなやましげで、そしていくぶんかなしげでさえあった。私はなるべくかれの要求に応じたい、けれどもそのためにはなおいくつかのあいまいな点が残っているようなので、これをあきらかにしたいと言ひ、そのいくつかの疑点をつぎつぎにかぞえだててみせた。

それはこんなふうにある。まず、日記をとりにかくというように全く個人的な必要のために、米軍当局が一介の日本人に渡島の許可をあたえることはありうるか。そのために片桐はどんな手続きをふんだのだろうか。おそらくは、いくつかの段階にわたって当事者の出頭をしつこく要求するにちがいない当局との交渉の過程をどういう方法で踏みとおすことができたのか。もし渡島に成功したとしても、はたしてかれは日記をうずめた場所を、まちがひなく指摘できるかどうか。それができたとしても、その日記は地熱や風化に耐えてどの程度まで原形をとどめているだろうか。そんな日記をなんのために掘りおこさなければならぬのか。こんなにもあやふやでたよりない計画に、やすやすと協力の手をさしのべるほど米軍当局は、ロマンチストぞろいなのだろうか。

片桐は私の問いかけに、身をかくしてじっと聞きいていたが、しずかに顔をおこし、言葉をまさぐりながらぼそぼそ答えた。第一の質問について、かれはジェームス・ヘンドリックスというアメリカの放送会社に勤務する特派員がかれのためにはかつてくれた便宜のかずかずを述べ

たてた。かれはこのアメリカ人のことをくだけた気やすさでジミイとよんだ。ジミイとはグアム島の捕虜収容所で知りあったのだとかれは言った。そのジミイはかれに硫黄島行きをすすめ、すべての手続きをかたづけてくれたあと、朝鮮戦線に飛び立った。

うずめた場所については銀明水に近い野砲トオチカの岩穴だと言い、地図を書いて、日記のありかを示した。ノオトは乾パンをいれるゴム袋に包んで、厳重に梱包しておいたから、原形はいちじるしくそこなわれることはまずないと思う。そう片桐は言った。

「これがかしたら一ばん肝心な点だと思うんですが」と私は言った。「なんのために日記をとりに行くんですか」

かれは恥ずかしそうに顔をゆがめて笑った。「じつは、出来たら出版でも、と思ひまして。もっともそんなあつかましいことは、ともかくとして、あの日記をいちど手にとってみたい。そんな気持から——」

私がかれに職業を聞いたとき、かれはつぎのように答えた。「ぼくは昔は製罐工をやっていたが、いまは鍍金のほうです。渡り職工のような生活でした。いろんなことがありましてね」かれはよわよわしい微笑をうすく口もとにうかべ、ため息をもらした。かれは江東区北砂町九丁目の平和荘というアパートに住んでおり、そこから北砂町六丁目の江東製作所という鍍金工場へかよっていた。そこでは主としてフライパンや鍋、バケツなどをつくっているのだった。私はかれのなかに町工場のもっている鉄と鉄とのふれあう重いひびきだとか、さびた屑鉄の刺すような匂いなどを、聞いたりかいだりした。

日本軍が一応玉碎したとみなされていたあとも、なおかなりの数の日本兵が分散して洞窟のなかに立てこもっていた。片桐は、三井兵曹長以下六人のグループとともに、北地区海岸の陸軍機関銃トオチカの岩穴に身をひそめていた。かれらはひるまはじつとその岩穴にかくれていて、夜がこの凝灰岩でおおわれたシャモジ型の小さな火山島を、深い闇の底にのみこんでしまったから、外へ這いだし、いまではそれが唯一の仕事である食糧さがしに出かけるのだった。それは、ひるま敵の眼をさけて洞窟の暗がり、じつとへばりついているときよりも、はるかに濃密に恐怖や戦慄にみちた時間のなかへ、かれらをはこびこんだ。

ある午後、かれらはその岩穴にうずくまりながら明瞭に敵の気配を感じとることができた。片桐が通風孔に顔をおしあて外部をのぞき見たとき、かれのせまい視野のなかで、軍用犬をつれた数名の米兵がきれぎれにゆれうごいた。片桐たちは岩肌を抱きこむようにして腹這いになった。ふ、ふう、ふ、ふう、というセバアドの熱っぽい息使いがあらあらしく流れこんできた。犬は日本兵の匂いをもとめて、鼻づらを岩肌にこすりつけるようにして、かぎまわっているらしい。米兵は大きな声で何か言いあっていて、ときどき口笛がするどく鳴った。岩を蹴りつける靴音が話し声をかきみだしながら、にぶくひびいてくる。その洞窟の入口は大きな岩でふさいであった。その岩穴に手をかけて揺りうごかそうとしているらしく、両足に力をこめて靴底を岩にぎしぎしこすりつける音や、岩がわずかにきしんで、ポロポロ泥がこぼれ落ちるかすかなひびきだとかが岩穴のおくふかくまで、つたわってきた。けれどもそれはすぐにやんでしまった。岩穴にこもった熱気が肌のうえを這いまわり、皮膚の内側にまでじとじとしみこんできて汗が全身からどっと吹きこぼれるのだ。のどはからからにかわいてしまつて口のなかにはあつい火のかたまりを押しこ

まれでもしたようだった。時間がどろどろにとけて、にかわのようにかれらをその岩穴のなかに、ねばっこく、とじこめてしまうかもしれない。とつぜん岩の割れ目が火を吹いた。米兵が自動小銃をうちこんだのだ。弾丸は岩にあたり、陰気な炸裂音とともにくだけ散った。硝煙の匂いがゆるやかに壕のなかにひろがった。米兵はそのまま立ち去ってしまい、時間はやっと動きをとりもどした。

「ちくしょう」と三井兵曹長が言った。「ちくしょうめ。このトオチカもあぶなくなってきやがった。やつら感づいたにちがいねえ。ぼやぼやしてると爆雷で吹っ飛ばされるか、火焰放射器で焼き殺されちまうぞ」

それからかれは片桐と木谷の名をよんだ。かれはふたりにできるだけ早く外へ出て、より安全な洞窟をさがしてこいと命じた。ふたりは顔を見合わせた。片桐は暗がりのなかで汗にぬれた木谷の顔がぶきみにひかり、眼玉がぎらぎらしているのを見た。ふたりは入口の岩を、長い時間かかって、ほんの少しずらし、からだをけずるようにしてその岩のすきまにすべりこませ、這いだした。ふたりは砲弾のためにえぐりぬかれた地面のくぼみや岩かげに身をかくしながら、焼けてどすくろくなった砂のうえを這っていった。かれらはやつのことで短十二糎砲台のあとにたどりついた。そこなら六人ぐらいはもぐれそうだった。かれらがもとのトオチカの近くまで這い戻ってきたとき、すでにあたりは夕闇に包まれていた。そしてトオチカに近づくにつれて、異臭がするどく鼻孔をつきさしてきた。ふたりのいないあいだにそこで何かが起ったことはあきらかだった。

片桐は岩と岩の割れ目に顔をすりよせて奥をうかがった。すると脂の焼けこげたような臭気が一そう濃厚に流れてきた。それは、うたがいもなく焼けた人間の皮膚の匂いだった。かれは木谷

と、入口の岩をずりうごかし、内部へふみこんでいった。木谷がマッチをすった。マッチの火はぼっともえあがり、ちろちろゆれながら、ほのぐらい視野のうちにいくつかの日本兵の焼死体を照らした。片桐はとつぜん全身ががたがたふるえだすのをおぼえた。

「見たか」とかれは木谷に言った。「顔が焼けただれて、べろつとむけ落ちてたな」

「うん」と木谷は言った。「腕がほろきれみたいにくげてねじくれてたぞ」

片桐も火焰放射器をあびせかけられた経験をもっていた。そのときの記憶が焼死体の匂いにたちまじってよみがえってきた。放射された火は、まるでそれ自体が明確な意志をもった生きものみたいに、通風孔から、突風のようにはげしい唸りを生じて吹き込んでくる。火はグオウ、グオウとほえたてながら伸びたりちぢんだり、ひろがったりとびあがったりして、自由自在に岩肌をなめまわした。ときには球体のようになってものすごい速度で岩から岩へころげまわるのだった。火は片桐に恐怖と同時に美的感動とでもいったふうなものをもたらした。火の運動はあまりにも美しい活気にみちいて、ときに、片桐は自分のからだをその火のなかに投げこんで焼きつくしてしまいたい衝動にかられたほどだった。

こうして片桐と木谷のふたりだけの放浪がはじまった。かれらは、顔が黒こげになり、片腕をもぎとられ、ちぎれかかった残りの腕をぶらぶらさせながらたようようにジャングルのなかを歩き、とつぜんぱったり倒れる日本兵の姿も見だし、迫撃砲弾に吹っとばされた首が木の枝に突きささり、しげみをざわめかせたのち、ぽおんところげ落ちる場面も見た。やがて八・二五平方軒ほどのせまい火山島で、生きている日本兵は片桐と木谷のふたりだけになってしまった。ふたりは米軍の残していった衣類や食糧を熱心にひろいあつめた。そのころにはすでに米軍の火器に

よる生命の危険はほとんどりのぞかれていたのでかれらは要するに生活を充実させていきさえすればそれでよかった。石で針金をたたきつぶし、帯剣のさきで穴をあけ、さらに先端を石でこすつてとがらせ、針をつくり、それで米軍の天幕の布を切りとりズボンや靴を縫いあげたりした。かれらは、たぶん死ぬまでこういう生活がつづくのだろうと考えていた。これ以外の生き方を考えることはほとんど不可能だった。かれらは投降すれば殺されるか、あるいは殺されないまでも、いまよりさらにもっとみじめな境遇に追いこまれるにちがいないと思つていたのである。そういうわけで、ふたりは何かの変化がとつぜんやってくることを、一ばんおそれた。いまの状態のまま時間が経過し、そしてその疲労にみちた時間の堆積の下で、少しずつ死んでいくのが一ばん好ましいことに考えられたのだった。そしてかれらのおそれていた変化は、ある晩、ついにやってきた。しかしそれは、かれらがおそれていたふうにはなく、いわば甘美に、快樂の気配をさえともなつてやつてきたのである。

その夜、ふいにふたりは洞窟の闇の底で眼をさました。わずかにひらいた岩のすきまから光がさしこみ、岩の向うに、おびただしき生きもののひしめく気配が、ふたりの眠りの領域にまで、しのびよつてきたのである。そのひしめきは、敵意というものを全く感じさせなかったので、ふたりは洞窟の入口に這い寄つていった。岩のすきまから流れこんできた光は焚火であつた。火は音を立てながら燃えあがつていた。生きもの——これは米兵であつた。十人ちかくの米兵は火をかこんで歌つたり踊つたり笑つたりとびあがつたり叫んだりしていた。かれらはビールを飲んだり罐詰の肉を食いちらしたりしていた。大きな影法師がふくれたりしぼんだりして岩のうえに倒れこんできた。火がゆれていた。それは木立や岩や砂をあかあかと染めあげて燃えつづけるのだ